

沖永良部バレイショ

「春のささやき」ブランド産地紹介

鹿児島県和泊町経済課長 大福 勇

1. まえがき

バレイショのイメージとして思い浮かぶのは北海道の広々としたほ湯で栽培され、大型機械で収穫されている風景である。

一方、南国の島、沖永良部島でも昭和44年から冬期の温暖な気候を活かした早出しバレイショの栽培が始まっている。

南国バレイショの特徴は、北海道産が終わり、新もので春を呼ぶ商材として全国の消費者から喜ばれていることである。

その沖永良部バレイショ「春のささやき」ブランドの産地紹介をする。

2. 地域の概要

沖永良部島は、鹿児島市から南南西へ536kmの南西諸島に浮かぶ、面積94.35km²、周囲50kmの小さい島である。

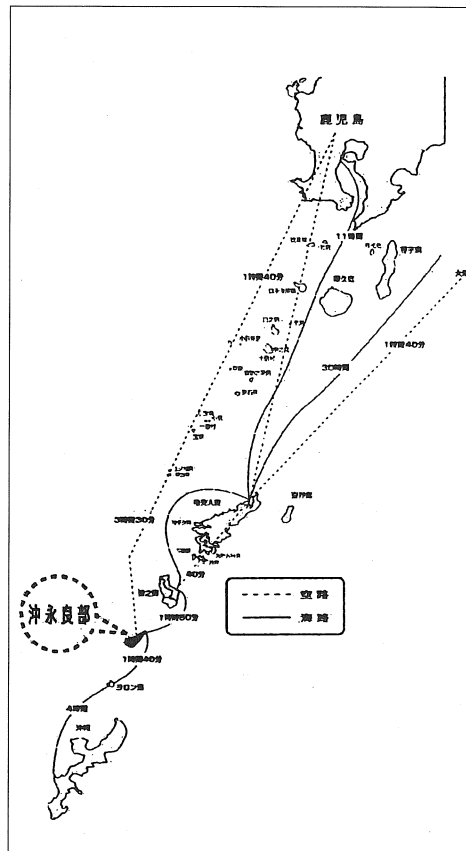
気候は亜熱帯海洋性に属し、年平均気温22℃、年降水量約2,000mmと四季を通

じて暖かく、ハイビスカスやブーゲンビリアなどの南国の花々が咲き誇る常夏の島である。しかし夏から秋にかけての台風や干ばつ、更には冬期には強い季節風が吹き荒れるなど厳しい気象条件下にもある（表1）。

地形は、平坦で耕地率60%と、島というイメージとかけ離れた、耕地に恵まれた農業の島である。

土壌は隆起サンゴ礁からなる粘着性の強い暗赤色土壌で、雨が降ると粘着が強く、逆に乾燥すると固くなるなど耕作・管理の困難な土壌で、海岸周辺は砂壤土のアルカリ土壌、中央部は強酸性の赤土に覆われている。

また、島には川がなく、農業用水はもっぱら地表水を溜めた溜池に頼っており、水の確保は農業生産に欠かすことの出来ない緊急な課題となっている。幸に、今年から国営地下ダム



による畑かん計画が着工されることから、畑かん利用によって島の農業形態も大きく変わって来ると期待されている。

交通は、鹿児島・那覇間を結ぶ大型フェリーが毎日1往復と鹿児島、奄美大島、沖縄とそれぞれ空の便で結ばれている。

沖永良部島には、規模や農業形態がほぼ同じ、和泊町と知名町と2つの町があるが、以下和泊町の概要で説明する。

和泊町の人口は、昭和30年の12,564人をピークにその後減少し、平成12年国勢調査では7,735人となっている。

産業別人口（平成12年国調）では、第3次産業1,852人（47%）、第1次産業1,502人（38%）、第2次産業594人（15%）となっている。

3. 産業の概要

本町は周囲をサンゴ礁のリーフに囲まれ、好漁場に恵まれているにもかかわらず漁業は沿岸漁業に留まり農業が唯一の基幹産業となっている。

農業の概要は、総面積の61%に当たる2,470haが農用地面積で、作物構成としては、基幹

作物であるさとうきびが681ha、野菜類539ha、花き類（ゆり球根、電照きく、ソリダゴ等の切り花）225ha、飼料作物393haと肉用牛3,749頭が飼育されている。

農業総生産額は、54億4,637万円で1位は花き類の32億4,096万円（60%）、次いで野菜類の10億8,823万円（20%）さとうきび4億2,889万円（8%）、畜産6億2,251万円（11%）となっている。野菜の内訳は、バレイショが693,315千円、次いで石川さといも339,080千円、インゲン22,917千円となっており、その他に最近新たな品目としてレイシ（ニガウリ）の生産が伸びつつある（平成13年）。

4. 本町農業の特徴

南西諸島一帯は農業の宿命ともいえる夏場の台風・干魃・潮風害と冬場の季節風災害や病害虫の多発、消費地から遠距離にあるという地理的なハンディを背負っている。また一方、冬春期温暖であるという有利性もあり、温暖な気候を活かした早出しの産地として、いろいろな品目が栽培でき、これまで市場ニーズをとらえた商品作物をいくつも生み出し

沖永良部島の気象（平成13年）

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	平均
最高気温	32.3	29.4	29.7	25.5	24.1	24.7	24.9	27.0	33.9
最低気温	23.2	18.6	13.4	9.7	9.2	10.9	8.7	11.8	8.7
平均	27.6	25.1	21.0	18.0	16.6	17.6	17.1	20.2	22.5
降水量	271.0	154.5	24.5	180.5	110.0	66.0	116.0	137.5	1,817.5
風速(平均)	5.9	5.9	5.7	5.8	6.4	6.3	5.5	5.4	5.3
最大瞬間風速	20.9	42.6	19.3	22.7	24.1	21.1	20.6	20.4	42.6

資料；沖永良部測候所

バレイショ栽培パターン

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
1 例	サトウキビ収穫			緑肥作物（ソルゴー等）			太陽熱利用土壌風化			バレイショ						
											植付	培土	防風ネット設置		収穫	
2 例	バレイショ			緑肥作物（ソルゴー等）			太陽熱利用土壌風化			バレイショ						
											植付	培土	防風ネット設置		収穫	

てきた。

また、本町の特産品に明治32年（1899年）から栽培されている「えらぶゆり」がある。

ユリは、純白で香り高い清楚な花で、南西諸島から琉球列島に広く分布している。ユリは、秋に球根を植え付け、初夏に収穫できる、いわゆる台風を避けた防災作物であり、また、最も重要な換金作物であった。そのため先人たちは、絶えず品種改良や栽培技術の改善に努め、生産組合を結成して販路拡張を図りながら、世界に輸出する品目として育て上げてきた。そのユリを通し、技術面だけでなく、組織づくりや産地情報、商品管理など園芸作物への意識を高めてきたのが本町農業の大きな特徴といえる。

5. バレイショ栽培の歴史

本町でのバレイショ栽培の歴史は、昭和30年代に栽培の記録があるが、おそらく食用バレイショを植え、自家用に利用していたと思われる。バレイショが定着しなかった理由として、温暖な気候で種芋の貯蔵が出来なかったこと、交通網が未発達で種芋の供給が出来

なかったことが考えられる。

日本経済が復興するに伴い都市への人口集中や輸送手段の発達により、早春の新鮮なバレイショの需要が高まったこと等から、暖地でのバレイショの栽培が試みられてきた。

昭和40年に、鹿児島県農業試験場大島支場で品種適応試験が行われ、「農林1号」との比較試験で「ウンゼン」「タチバナ」「シマバラ」「チヂワ」が栽培されていて、昭和42年からは、各支場において種芋自給の目的で「バレイショ採種に関する試験」を実施し好結果を得ている。

昭和44年、大島支場で早掘バレイショの植え付け時期試験が行われ、その年に本町でも販売用の栽培が始まった。

6. バレイショ栽培の概要

本町農業は、基幹作物のさとうきびと花きや野菜の園芸作物、それに肉用牛を組み合わせた複合経営を基本とし、特に肉用牛生産から発生する堆厩肥を畑地に還元して地力維持を図りながら、さとうきびとの輪作体系を基本としている。

パレイショの栽培基本パターンは図1のようになっている。

さとうきびは、作型によって夏植え、春植え、株出し栽培があり、一度植えると3年～5年ほ場にあり、3月に収穫後廃耕され、すぐにソルゴー等の緑肥作物が植えつけられる。

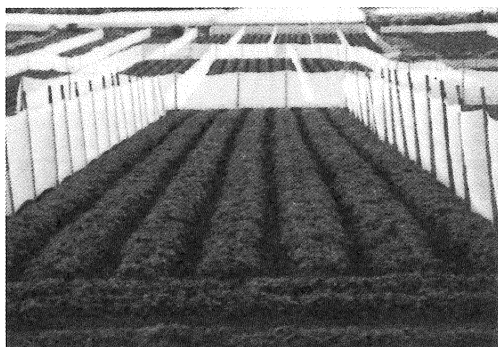
7月に2～3mに伸びたソルゴーを鋤込み深耕し、真夏の太陽熱で充分土壌風化を行うと

共に、土壌診断後土壌改良を行い、11月上旬から植え付け、2～4月にかけて収穫する体系となっている。また、後作にもさとうきびや緑肥作物が栽培されることから、これまでクロールピクリン等の土壌消毒はまったく行わない自然循環型の作付け体系となっている。

7. 栽培品種と種芋の入手



上. 植付け、中、覆土
下. 防風ネット設置



上. 栽培状況、中. ハーベスターでの収穫、下. 収穫状況

バレイショ導入当初は農林1号を主体にした栽培であったが、昭和49年に北海道厚沢部町から^{あつきぶ}メイクイン1tを導入し試作が行われた。

早春の新じゃがメイクインが、九州管内や関西、中京の市場で大好評を得たことから、本町ではいち早くバレイショの主体をメイクインと位置付け栽培体系の研究を進めてきた。特に種芋については厚沢部町を限定して安定確保を図ると共に、種芋のサイズを①休眠が浅く11月上旬に植えつけられる。②切り口が小さく腐敗を最小限に防げる。③種子切り作業がしやすい、等からSサイズを主体に導入してきた。

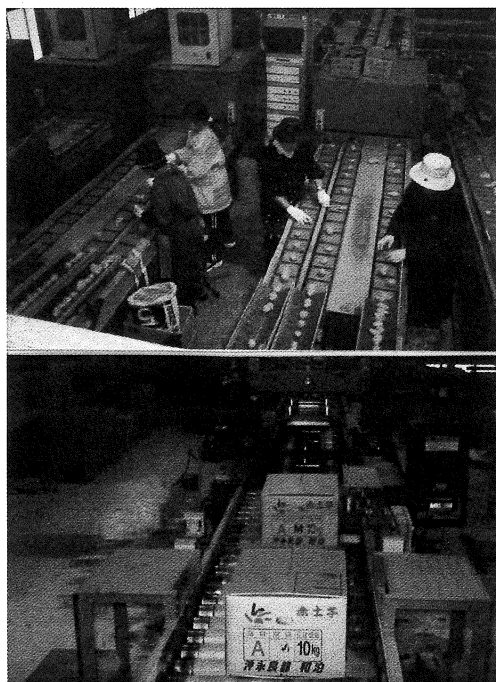
8. バレイショの植え付け・収穫等

バレイショほ場は南国の厳しい日射しのもとで風化され、更に毎年襲来する5～7個の台風による風雨と海から直接吹き上げる潮風で畑にはたっぷりと海水のミネラルが取り入れられる。10月の穏やかな気候のなか、気温が20度を下回った頃から本格的な植え付け準備が始まる。

種芋は8月に各園芸振興会の支部を通じて注文する。その頃になると北海道の天候、種芋の生育状況が気になり、毎年振興会の代表が現地まで赴き生育状況の確認を行っている。

10月になるといよいよ種バレイショが入荷してくる。種バレイショは北海道から日本を縦断、約2,000kmの距離を運ばれ、港ではコンテナ積された大量の種バレイショが降ろされる。港から一旦JAの集荷場に運ばれた後、植物防疫所の検査印を確認して各農家に配布される。

農家では配布されたら早めに袋を開け、サ



上. 下. バレイショの選果

ンテナに移してフロンサイドで種芋消毒をして風乾し、植え付け3日前から種芋の切断に入る。

10aあたり200kgを準備するが、ほとんどが50gのSサイズで2つに切り分ける。

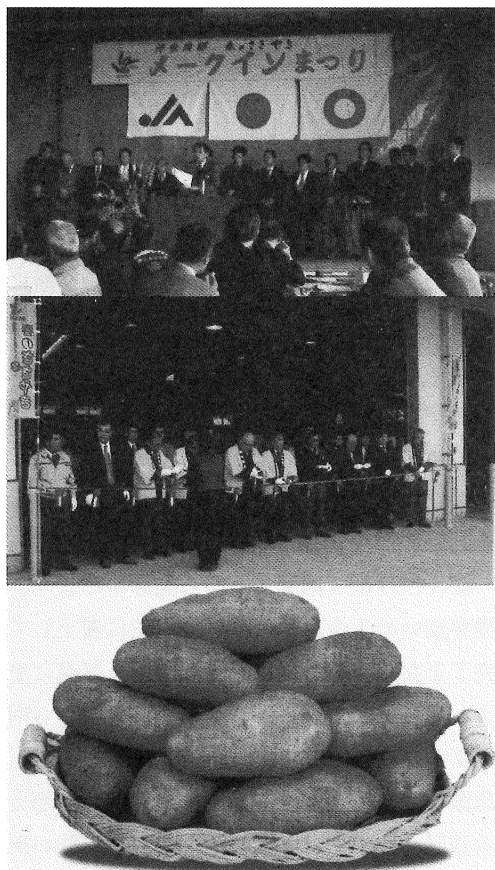
植え付けは、独自で開発した植え付け機を取付けたトラクターで行い、施肥と軽い覆土を同時に行う。所要時間は10a当り約1時間。

植え付け後2週間ごろから発芽が始まり、発芽揃いの1か月目に深さ20cm位に覆土して完了となる。その後は適当な降雨と気温に恵まれ急激に成長するが、この時期大陸から南下する寒波の影響で強い季節風が襲ってくる。急激な成長で茎も軟らかく、風速20mを超える強風、突風にはとても耐えられず、強い風で茎の折損や葉の裂傷が生じ、そこから疫病が蔓延することにもなる。島のバレイショ生産においては、この季節風対策が最も重要と

なり、最終培土を終えらるとほ場を高さ2mの防風ネットで覆い、強い北風からバレイショを守り大事に育てている。植え付けから100日で収穫に入るが、収穫まで茎葉をしっかり保ってやると植え付けた種子量の10倍、2,000kgの収量が確保できる。

収穫は掘り取り機で掘り起こし、人力で拾っていくのが主力である。昨年（平成14年）からバレイショハーベスターが導入され、掘り取りから収納まで一行程で出来るようになり、大幅な省力化が図れるようになった。

掘り取ったバレイショは、その日のうちに



上. メークインまつり、中. 出発式
下. メークイン

JAの集荷場に運ばれ、大型選果機で選別され、鹿児島ブランド「春のささやき」として10kg詰め出荷される。

本町では毎年2月上旬に、全生産者並びに市場関係者を招いて、メークインまつり、メークイン出発式を行っている。本町のメークインは赤土栽培で表皮の肌理が細かいのが特徴である。

今年（平成15年）は植え付け時期から天候に恵まれ、冬期の季節風の被害も少なく、順調な出荷が見込めることから、2月6日、盛大なメークインまつりを行い、いよいよ出荷本番となった。主な市場は、関西、中京、中国、九州市場を中心に4月下旬まで続けられ、今期本島から出荷される早出しメークインは約10,000tの計画となっている。

9. おわりに

本町のバレイショは、秋から冬にかけて気温が20℃を降った頃に植え付け、冬期の18℃で充分成熟し、早春に春を呼ぶ商材として出荷される。栽培期間がバレイショの生育に適していることから、ほとんど農薬を使わない栽培が可能であり、肥料も有機肥料、JAで製造する有機ボカシ肥料を主体に安全で安心して食べられる商品、メークインの特徴である赤土の肌理、煮くづれしない、自然のミネラルをたっぷり含んだ新鮮で健康な食材として消費者に喜んで食べていただきたい、そのような気持ちで栽培されたのが、鹿児島ブランド「春のささやき」である。今後共地域を挙げてより安全・安心なバレイショの供給産地を目指して取り組んで参りますので、南の島の春を感じさせる「春のささやき」をご賞味頂きたいと思ひます。